
コミュニティと**集団精神療法**

(4)

— デイサービスセンターで —

藤 信子

A デイサービスセンターにクイズを持って訪問していることは、「コミュニティを探して(9)」に書いている。そこでは、デイサービスセンターを「居場所」としてのグループと考える時に、クイズを介して話し関係の作り方について考えた。この頃、訪問を始めた時と比べ、デイサービスセンターの利用者の変化を感じているので、そのことを考えてみたい。

このデイサービスセンターは、京都の町中にあり、以前は友禅などの絵を描いたり、染めの仕事や、着物関連のお店をしていた利用者が目立った。そんな中で話を聞くと、友禅染めの工程が、幾つにも分かれていることを知り、着物のお店が映画やTVの衣装を用意した話を聞き、京都の町中の産業に触れる思いがしたものだ。ところが最近、利用者の話を聞いていると、九州弁だったり、標準語だったりという人が増えてきたように感じ

る。クイズをしながら聞いた話では、子どもと同居、あるいは近くに住もうということで、京都に転居して来た方が増えてきているようである。住んでいたところは、九州だったり、関東だったり、また京都府下の町ということもある。この地域は、ここしばらくマンションが増えたが、利用者の方はそこに住んでいる方も多いようである。他所の土地から転居してきた人だけでなく、京都市育ちの人も近所のマンションに住んでいると話されていた。

私が学生の頃は、堀川に水は流れていた記憶は無い。今のような親水公園ができたのは最近である。だから友禅染に堀川の水を使った頃というのを直接は知らないのだけれど、友禅染と堀川のことは知っていた。だからデイサービスセンターの人たちの話を聞いて、ここは友禅染の場所だったということを経験した思いだった。一緒に行っている大学院生は、そんなことは知らない。話をすると時代

が移っていくことを感じる。マンションが建っているところは、友禅染の家があったのだろうか。それはどこに行ったのだろうか？京都の織物の工場が海外に出て行ったということを知ったことがあるけれど、友禅染もそうなのだろうか。それとも、着物離れが進んでいるので、よほどの高級品でない限り、作っていないのだろうか。地域の産業の事にも拘わらず、何も知らないことに気が付いた。産業の変化の結果がマンションなのだろうと見ると、この町の30-40年ほどの間の急激な変化を感じる。

府下のB市から転居してきたというCさんは、一人になって畑をするのも大変になったし、子どもと一緒に住もうというので、市内に來たと言われた。以前親が亡くなって住む人が居なくなったので、家と土地を農地付きで売るといふ話を知り合いから聞いたのは、そのB市のことだったことを思い出した。若い人が仕事を求めて都会にでる以外にも、こうして地方の農村は人口が減っていくのかと思った。Cさんは穏やかで、「京都のクイズ」をわたした時に、「京都で暮らしていないから、よく知らない」と言われ、最近転居してきたことを話された。知らないと言われながらもクイズには参加し、答を聞いておられた。そして「漢字クイズ」では、解き方を理解すると答を探して考えて正答すると嬉しそうである。Dさんは関東で暮らしていたが、やはり子どもが京都と一緒に住もうというので、転

居されてきた。「京都のことは知らないから・・・」と言われるので、「私も知らないことが多いから、少し知るようになりましょうか」と言いながら、京都育ちのメンバーの話を聞きながら考えて回答される。この方も漢字クイズの方が得意である。

「京都のクイズ」は、京都の人に教えてもらおうということもあって、持って行くことにしたけれど、京都以外で生活してきた利用者が増えてきた時に、どうしようかと考えた。今のところ、CさんやDさんのように、京都には最近來たということから、自分のことを話されることもあるので、コミュニケーションツールとしては利用できると考えている。ご当地ものとして話題づくりになり、また他所から來た人には、自分の暮らす近所のことだということを知る機会になればと思っている。時には他のクイズも考えようかと思う時もあるけれど、なかなか替わるものが見つからない。

デイサービスで行うクイズから、京都の町、産業の変化に気が付いていった。京都の産業の問題だけでなく、高齢化社会、地方の人口減少なども関連しているようなことが、この小さなグループから見えてくるようだ。そのような社会の変化やなども考えさせられるグループの中で、メンバーの話を少しずつでも聞きながら大事なことは何かを考えていきたい。